茗荷割烹
鯉魚腸
第四編

猫々道人稿
久保田彦作綜
守川周重画

青盛堂梓

L48-83727

A510
4

荒磯割烹 鯉魚腸

四編上の巻

久保田作

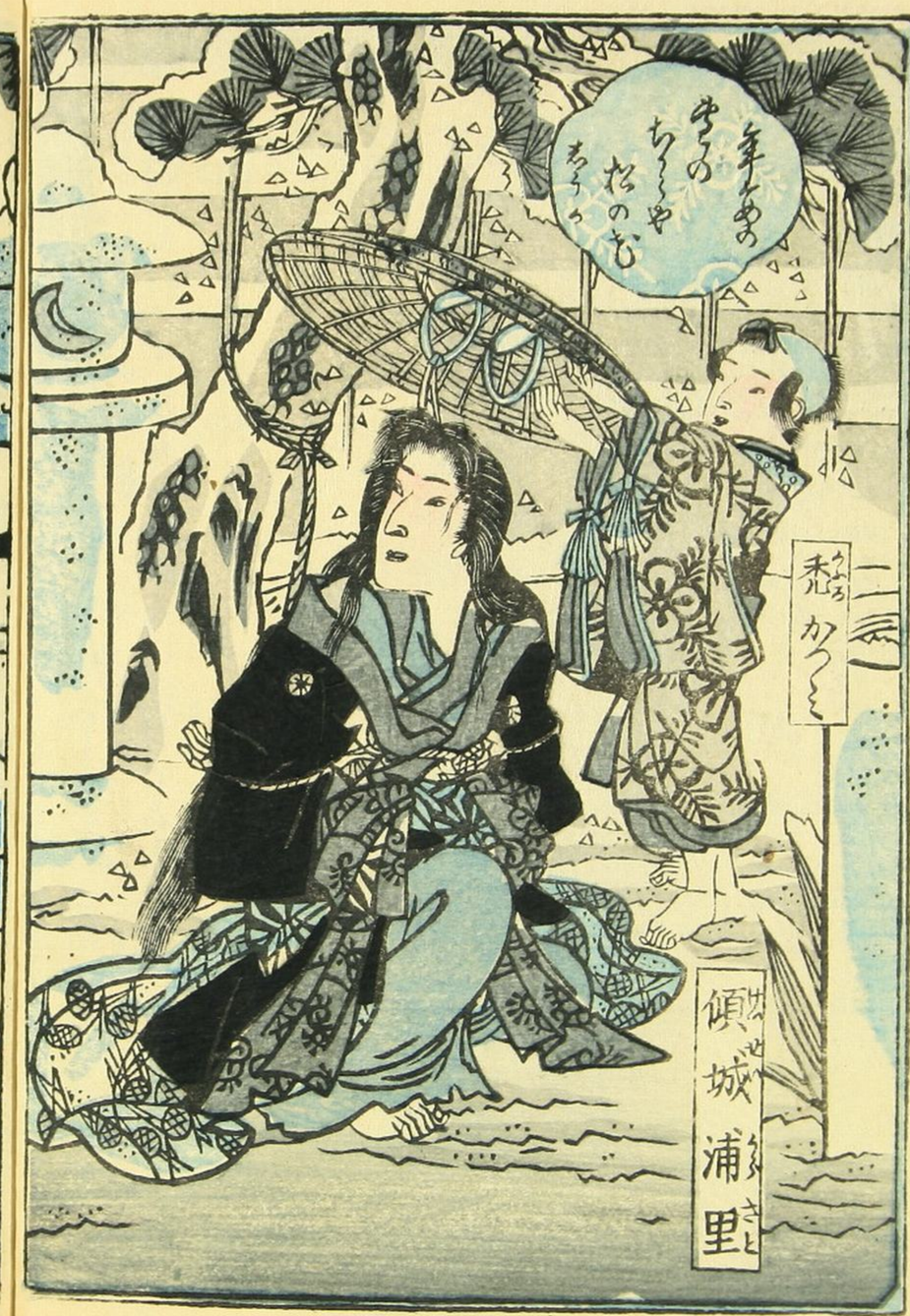
国重画

加〻吉板

回顧すれば廿有餘年。故人八代目とゝらの丈が。彼明烏の浦里時次郎を演じ玉ひし。當時禿と勤めしハ今の寺嶋梅幸子と先年冥途の蓮臺座へ乗込しー三津五郎丈の二個みて。雪の中より芳香しゝ。寒紅梅の室咲ハ芽栄えて通しー花の兄故人ハ叔置音羽屋が。昔しの緑色久ぬ實よ天造の奇と云べし。其梅が香の浪苍土産をいさゝか補ふ草双紙こゝで四編の花がゝ。浅香の沼ハ深く共浅き趣向の拙作ハ実ハ明烏が阿房の業と。感じてのつゝ序言とす

久保田ひさく

春日屋時次郎
みどり


かつら
傾城浦里

○さてく近きの男女の友と
清少納言が枕の双紙へ
もの世
ものも宣
さるる

(一)

大迦要性

(二)

女子の友の苦人姫
ものの死人のきき母の
為に文結人世後宴
の乃生涯とぶる
遂て七月八墨染の尼とも
てもやく小七ッのと
ものの小人深る八代目がやとき姿

(三)

(四)

お者ものの
の後海
小友
く
重し
ゲ

「ふき」はけの羽子板も碎と「碎世」小社会ゆてちらし
二人笑向氏ふ人あるりて
海老ふり和ふ色」まで長
より」が三升とそも婦
うふ和世ふ長ふる縁
結び流りに面の笑
とび走ふとちらへく
四十と山形
あふそ恥ふれ
ぬ長ふ長ふと
おあふ

㊁文さふきのふふふとまぎ
十とせあるりのふのふぐ
忘ふ風深ふが
付ぐぶも㊂

㊃芳ふふ
病ひのふあれ
山酸のお嫁さ

後の祖母と
取ふふせ
ふふ方と
ふふふの
紀意

氷
拵
ひて

「別」が㊀

○二人八
八代目の供ふり

編ふて拵ふ
湯治の新根
山積る白
雪ふれ
ふふで
意房の国
ふ文ふと
和ふ風付方
の三升も
愛無行の
仕ふ中

次へ

つぎき 拾廣の
保告ごと
ふとて是の
同じく頃元なる
福位宮へ遊客
世と深えぶまく
も再ふ入り
新玉姫しさ
お母様供ふ
つれくる紋へ
色宮ふ切
ひさまて
(二) 幸共打出らんと
まと家ふしと見物さん
私ー
共ハモウ
一人前
(三)
(四) ふめん
ふる見
祝男さん

(四)「一摸下さる」
「今行く」と放
さぐる枕も中み
「相撲の名」
ひとつ
一字知れざる此名
刀先此通り私
とて引て摸いた
ぬと鞘の仕方
出ず見えの一下
深入る仕方
その元

の五郎入道深見之介也如何相
違なきとの仰ぶ深見之介ふ様とうち
「祝方の結ぶ深い仇で来て放そうぞと
云つゝ源之介栗の中より袋ふ入る」
「仕方元取」「忘れも申ず故十とも」
猿若町の楽屋の奥之部
まとの白波の振地の屋
風立切り」内ぞ家しき
見向ひ」すく来て互ひふ
つゝまびかゝ
ら「ひ」波の振ひと
出方 (三)

恥かしい
女子の
(次へ)

(三)

はしたなく笑ひて

つぶやき

(四)

人の

なれど

重

左
右
小田原道
右 湯元
つゞき
湯ゐ人の
きくあれどゝゝさ
閑果の去底
ようす
婦と
きゝに
約束世
一
二
女子ハ
おまつ
呂一人り
三
湯元
四
「そうや
れん
そうで
どぎんきゝ「伺
で空
とび
いつの
そと
楽屋え
ろ盛田や
ぶらぶら
き河ふ渡ぶ
「ろんれ
やべ是
ろどまで
伝伝
「まつ
てまぎ七
とせ「まつとば
つゞき

つぎき
ゑゝぬ
けすの
むごたん
ぢごくみ
れど㊀
㊁
河へ
盛りと
ろー
焼き
ケ㊂
㊃
俗の約束
そこおあ
㊄
㊅
米がセ
ッく
「イヤく㊆
の
次へ
業の家の
様成田不動も照覚
あれ空を出べき道
さゑ地獄へ
落る法
もこれ
と逆が
ちろ
きろ
市川の
男の中
㊇
まも永紀
ぬ出必らば
うこぶ人下
さるる紙
もあ江戸の
金十帝男に
吟ハけつしてる
い「そりや高
実ホ弓
つぶも拉
と筆こ
ゑゝ十八

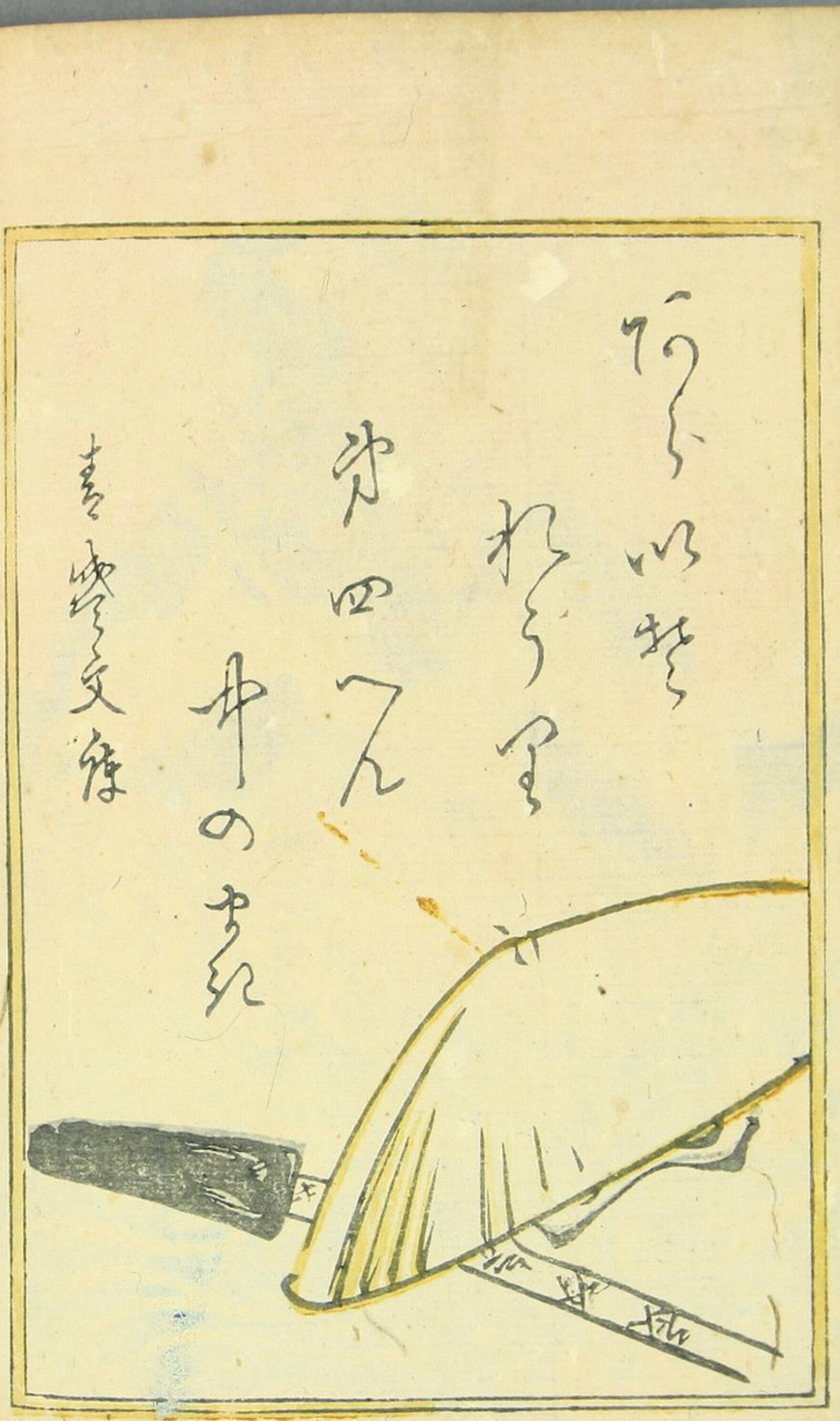
新編西國奇談　廿編　追々出版

薄緑娘恋女　八編　追ゝ出版

娘庭訓黄金の鶏　追ゝ出版

御届
明治十一年十二月十七日
神田區仲町二丁目六番地
編輯人　篠田久次郎
日本橋區米沢町一丁目七番地
出版人　堤吉兵衛
地本錦繪問屋

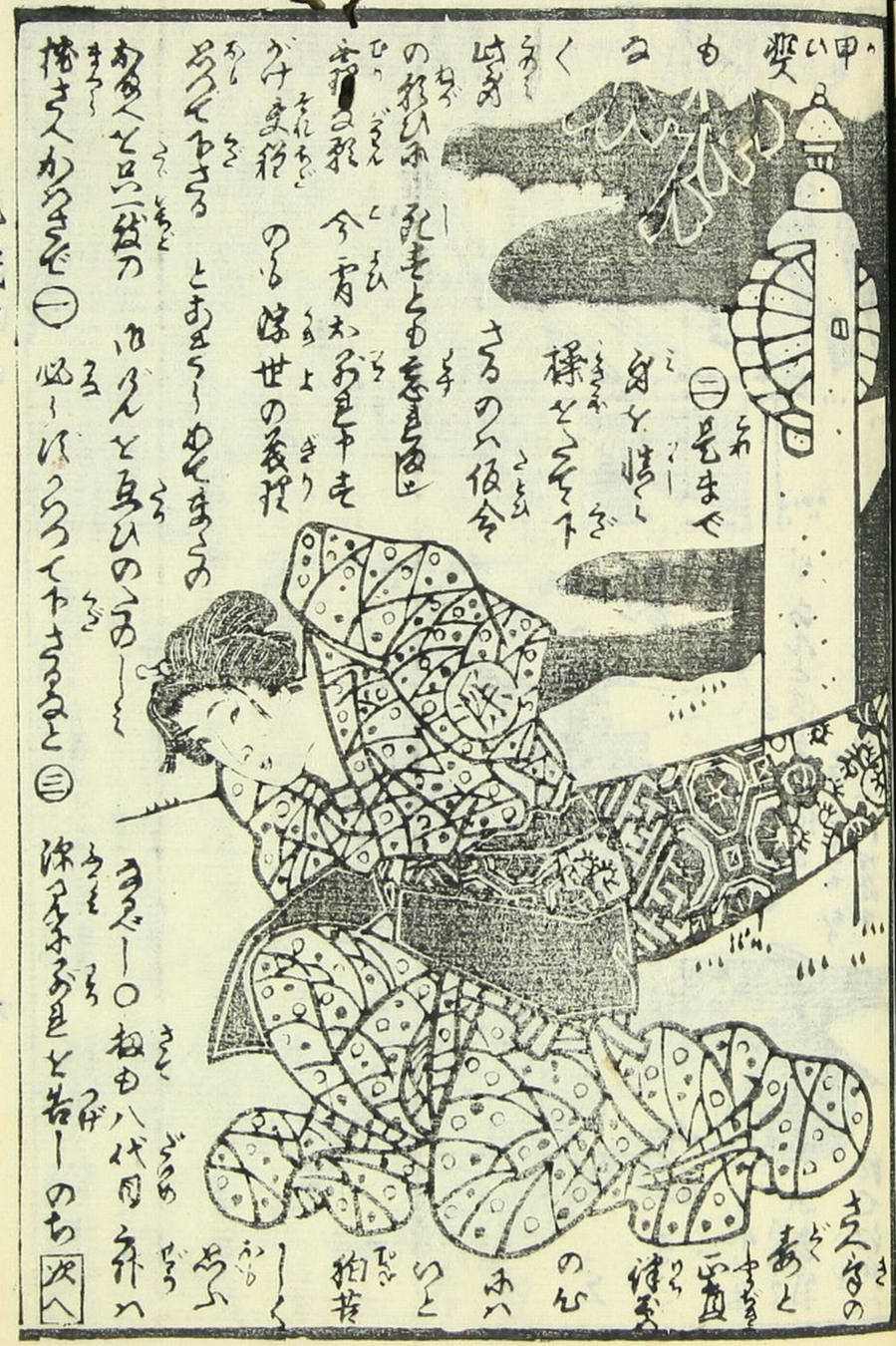
中



上ゝうつぎ　新解出生びの下紐　㊁そんまゝ今青へこれが　㊃拙へまゝこゝろねど亜
ちゝうと結びめ正き成田　おのれ明れかに不ゝう　と拙云ひ　本縁の結かゝ流
西ゝ外「深えさゝ方ゝ幼ゝ　まれうゝと業内ゝつゝ　ゝ計ゝゝめゝのあひ互ひ
別深ゝ」ゝのおゝ長」ゝ　席ゝ拙ひあゝゝ紅色へ　に長を結ゝゝさゝ」ゝ
いゝゝ今青ゝ長ゝゝ交ゝ　ゝゝゝゝゝゝ　ゝ長ゝ」ゝゝ
張ゝのゝゝ日ゝき」ゝ　七甲実ゝ」の初形八代　ゝ切てゝゝ入ゝ狭ゝ
ゝ何ゝゝゝいゝゝ結ゝゝ　日実十弟八結病実　ゝ切てゝゝ紅実ゝ立ゝ
さゝ　まゝく瓜田ゝ米と　癒のゝ為ゝ茅根の湿　ゝ生病ゝ拙ゝ茅ゝ」ゝ
いゝゝ梨ゝゝ冠ゝを　象へ保ゝ結ゝ汚治　ゝ翼ゝ結ゝゝ紅ゝ
正ゝゝとゝゝ紙ゝゝ大　ゝゝ」ゝ先ゝ側の湯　ゝゝゝ茅ゝゝ御意実の
ゝ実又略日ゝゝと続ゝ　元の縁仮横へ活の　ゝ出ゝとて出すと遅
お結ゝ深えさゝ方さん㊀　法客ゝゝ中に㊂　と云へゝゝ　次へ

つぎ
(四)
(五)
(六)
(二)
(一)
(三)

これよりつぎのあ
ときに伊五人の
ちゝをみおろ


甲い奴
(二)
(三)

(四)

次へ

つゞき 源氏八丸世
(一)
(二)
(六) いのと押して
(八) 樹
(七)
(四)
(五)
源川

新編西國奇談　甘編　追々出版

薄綠娘志ゝ女　八編　追々出版

娘庭訓黃金の鷄　追々出版

御届

明治十一年十二月十七日

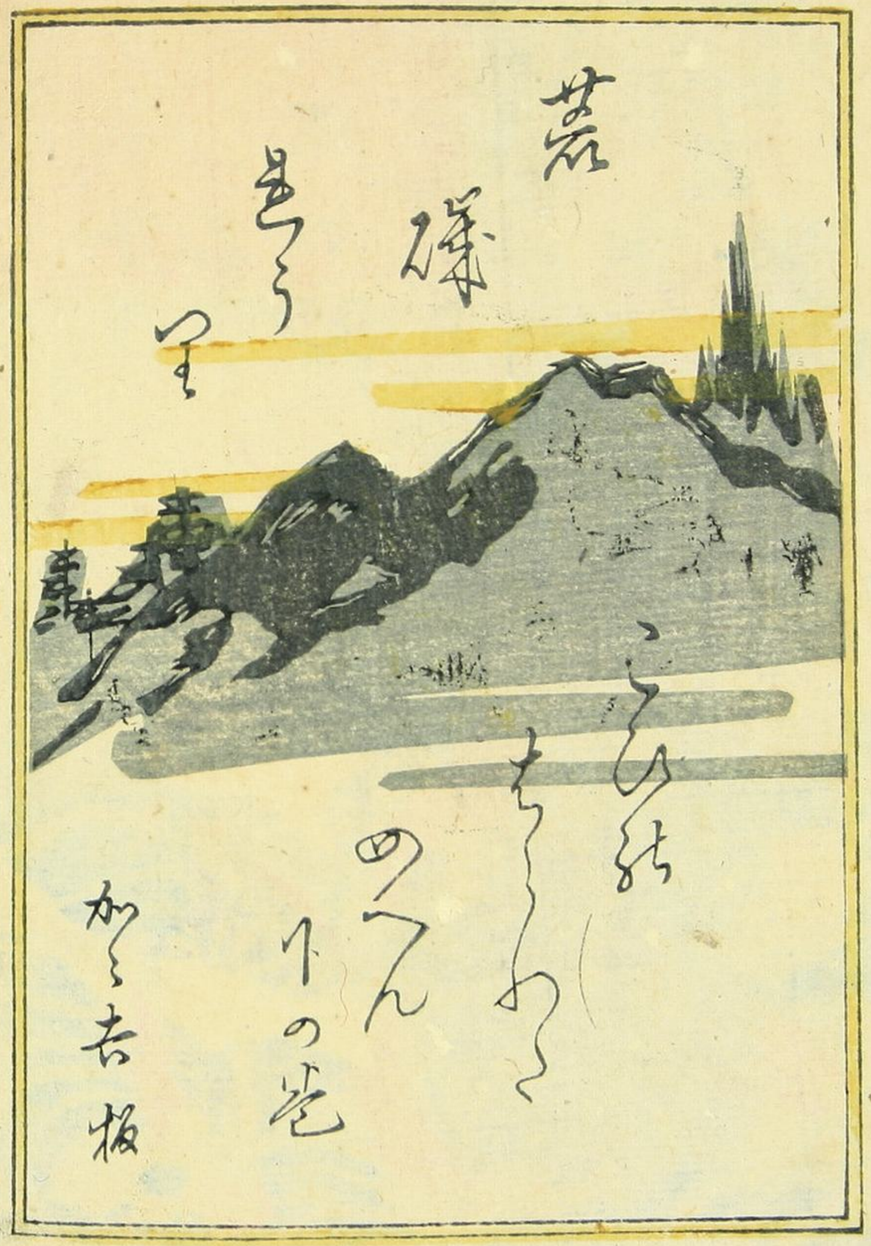
神田區仲町一丁目六番地　編輯人　篠田久次郎

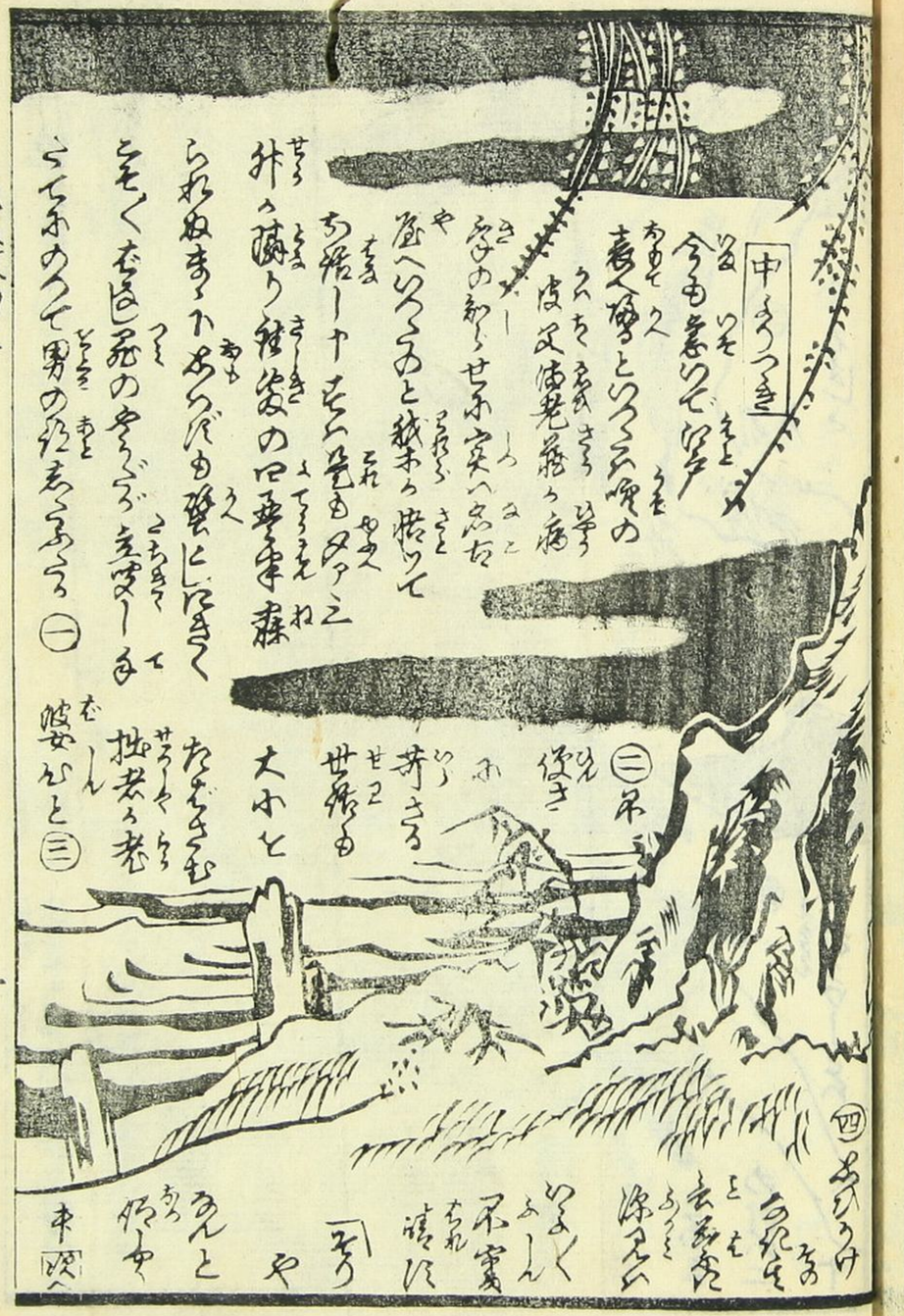
日本橋區米沢町一丁目七番地　出版人　堤吉兵衛

地本錦繪問屋

荒磯割烹
鯉魚腸第
四編一名
團十郎の
はなし

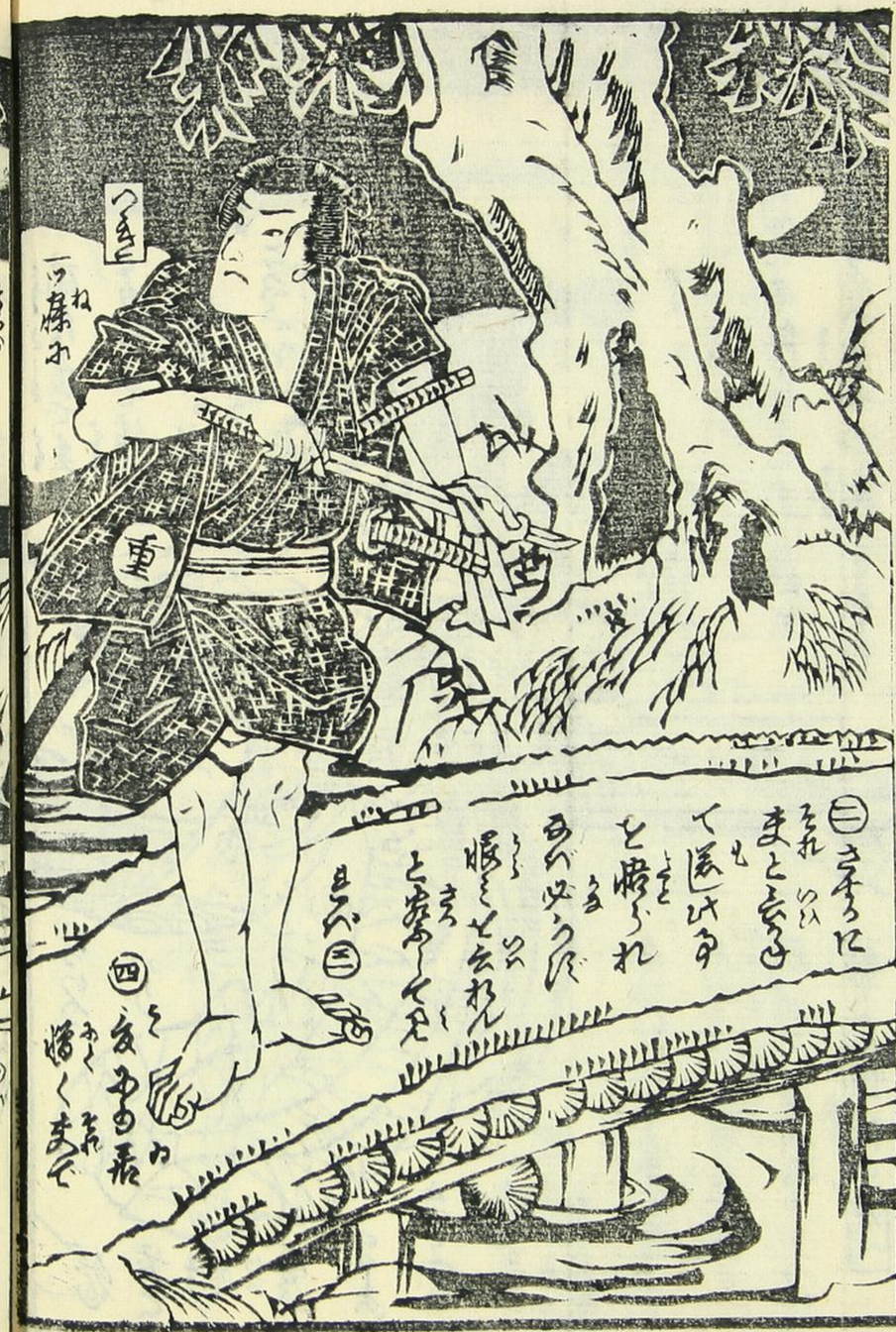
下


花
葉
まつ
ちる
ちる
のこる
十の花
かく古板


中そつき
今も名のこる
大ふと
拙者ら者
(一)
(二)
(三)
(四)

(一)
(二)
(三)
(四)
(五)
(六)
深
東

桃もぐ〳〵
ひそく〳〵と
山温泉の湯
よりも熱く
笑の声も淋
さびと紫りん
涼き
女まづれ
そん
女源四郎
らお前さんふたりの
と愛もあんまり宝とし
あふれれも女七べ
楽しむ者も
大うさかまへ
さるうめ
はたらく〳〵と
いろと
とびはねさ
でまら
さろき
もも
ゆと
彼が出立
ようなが
ら
次へ


重
一口喰ひ
三
四

つゞき
四 突ふ他人の地蔵さま
二 渋をぬって急
三 ほとゝぎす
五 一反ふ迄
六 服部屋
次へ

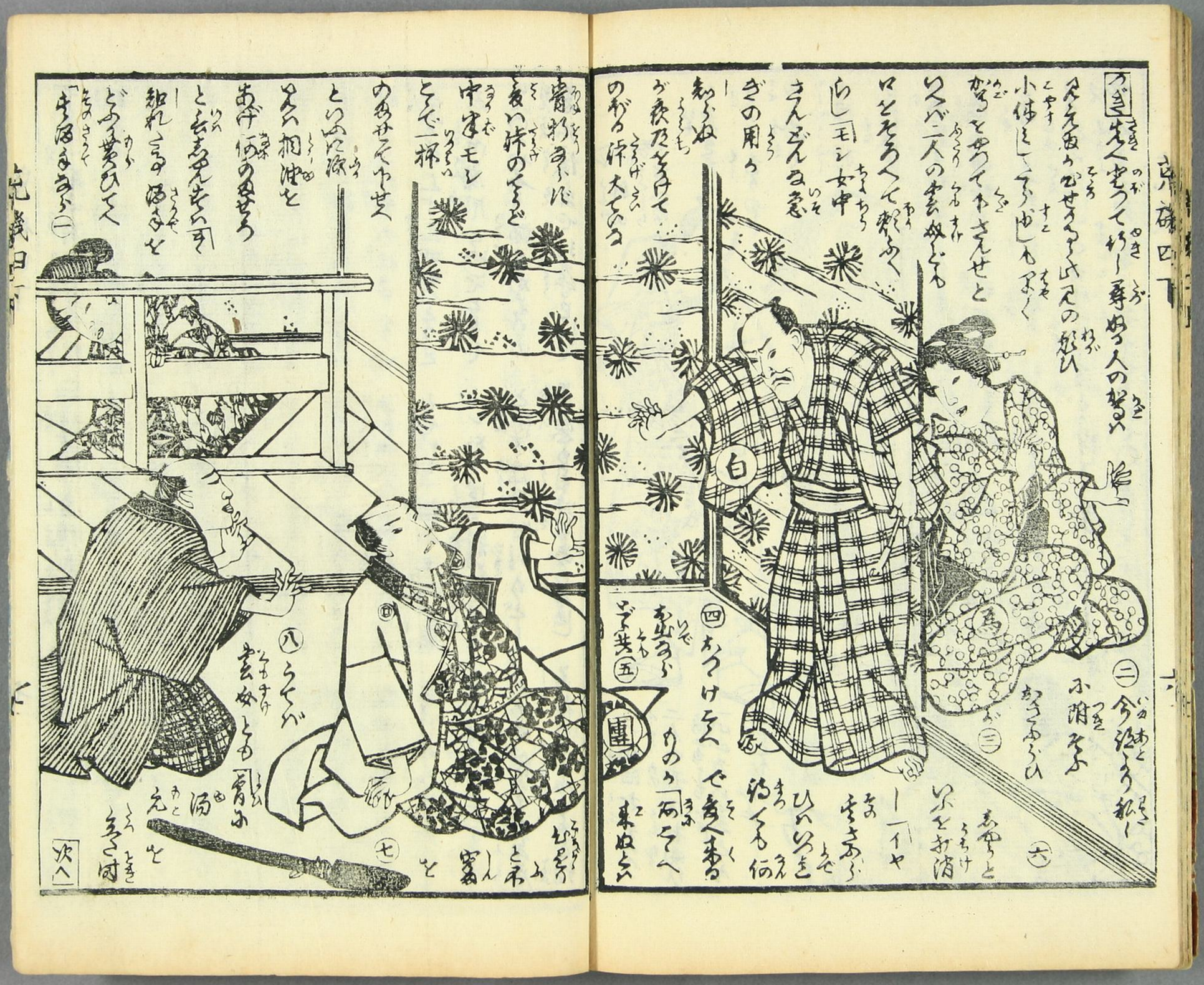
つぎ　つく思ふる
から燈籠の如くれなる
白ぶ足袋一形相
さもさき匂ひ
有様と見るよう
様も殺生低く
手を合
さんさるゆ
ゆり見せ上い
二挺ご紅退火
て急ぎゆべ
作い浪波の
東
(二)
東北を
遊ふ身
山色
藤
武
方
の
(三)
腰出して
あげ様と
あまりの
絶を出
(四)
ふ條が深き
ちと暑ふ
ふ様の
ねべ男
ふ眠の
かずく
ちいが
少く腹が出て
ふも物側先生
白ふ足べをくち袖
ふ紅ろく赤ひ隠
供のものハ女人共風呂
ゆ入て振ふ袖を
花が身を
(五)
坐うたはらば
遅付
ふ様ひ
白枕
赤も赤く
近付ふれと
義を入てせざる
ハ勇ふ
花を不ふ
の手かつて赤
ふ行ば女子一人の
表をハ袖繻
(六)

(四)

(三)

(二)

(一)


つぎ
先人ぞうてゝ
二
今酒あとう私
小酒
三
四
五
六
七
八
次へ

「つるき」一所ふ所法遠ず猶 (二) 遠ずず身体無に究 (四) 人ごろくと数と涙
邪奴の一下癖ある奴とさ方白 まつ」の美ふ付てる事 ずるふきみびこるにを
惜つて左と久人里たるを 義どめと西ぶがせめて一所 押へてそめんごうと
泥水だてごんきに法ずわめ ふおぶ多ず好しく暮貝 生徒ごに上ふ跨ぐ
ふぶ多ずいふ所のなだらく 之多のものやごに上て 出ごぶふ好うよと
強ふふぶる石地蔵のず 人くる西へ伴のこ 人くる西へ伴のこ
ぬい雅も解るのこ」実い よらうとしてくに減ふれ 智慧へふおろさを
歌うう笑乳の仕多今ぶ るを雅も近寄るふうの 相油とあげて花出
聲ずの三十三四ぶうう と 「いうぶ」ふ系麻をりて 出ごふ人ふ和海え
考ごは蔵屋ごゆ」てとまで とてうちぶ綱ふ遠ずず魚 ごび陣へつ見出を渡
えのぶぜずう泥ふがずの ドレかと遠ず料理て学う と逃る深ふえを引のぐ 人のふ陣を蔵ふ届
念仏陳多で引等ふ見て 慈悪も用特もあう白 面極の出ふめごると細

ずうう巻ぶぶせずと性 猫多の力ふ引ぶ の十ふう抜く一刀長ふれ
生しうとむぶんても智 深ふえ一生ふ命逃んと 命ふ水の出ふ作ふあり
の肉ず深ふを引立 ふ迫ふせんと花ずう ぶ」深ふぶ上へ「まうぶ」
ふ迫ふせんと花ずう くと数ふれどて山ふ ひとうの岩の角先を寺
ぶむふ先を考うと 写くのを巻ふる岩い猫ら だうう切ふれバアりと付りに
捕へ「そんふ先別深ふ の智性来ふ志ぶく出 ふを敵」ひ宣へうふく四
ぶが立る肉ふうたと久 ぶうういふく魔ふ志 脇力のこうふを知ふたバ
連といふて人ふの敵 更作の方ふう一挺のふ 巻人のありて新ふうず
多人連られしふふの付 ずるふて中方を目ぶ巻 西ふうふ深ふ一人を渡ふ
ても作ふう横ふ切ふと 来るてうちん幽ふふえれ ふう切ふんとするとあく
いふうふ脇ふとあって云ふ ば深ふえふ巻ふから法性 きて遊ふく多質を
と色へ弄ふんゆる西絵 (一) も数ふば志ふあげて (三) 助け深ふを」て 次へ

いぎき　きりやく　きりやく　きりやく　きりやく　きりやく　きりやく

勝くきをきなおごも長延ひきすも安堂

のいろ〻金冥加な奴等であると

力とあんと鞘へきこめ

とゝゝ入まう涼えと

ゝゝわびさいぜんの悪

さゝゆえうち意地さき侍

ふウンとのうけに反返り

と矢巳う正体巳宣義之

くのふお撃るれぐて

涼え

と把

（二）やゝてゝふゝあるせんとゝ陳えへ

歯をくひ歩びく中〻ゝ中一へ

入ぎと毫ふ遍のかゝ修

国りて

彫〻ゝ生ま

字付の業

とゝまま

れど

ぶんの問へとゝぶぜゝぐん

水のまもびかん

せんと侍とゝれば毫もれせと

白樺旅宿

冠り

袖

衣の手ゝ

花ゝ（一）

これまつい

毫ひとあ毫ゝ涼ゝぶゝふ涼ぎと

魚のほ吸めあぶざれば容易

ふ問へ通ゝぎと

寧毫ゝ方の

いゝふゝゝく

そあやゝと

柄投の

五　次へ

花のを流絣柄投のえは毫毫縁

若巳ゝ乱ぎゝめゝゝる巳紋の

反申の縁ふぐと北藤毫

渝投のゝあゝふわゝる

新編四谷怪談

久保田彦作著

いろき おのがあらんや深えが
はくらちゃうと水色ちゃんぺい
ごろうり一滴の水と
葉がのんべ
通るべウレ
と一下賛恩
そくお宮花
ちゃうと花起ー㊀

藝子梅子

月の扇ちょくしくこ千せ
雑ど笑ハ㊂

月い芸百と放生水の名と濃て
物と照ル涼天が新のすぶんゆ寺

㊂我を忘れて名ちゃう新形ー㊃㊄まぐ考ふ
嵐ゑる
出版

色
姿
ひと

○第五編
引つづき
出板仕ル

御届 明治十四年一月十九日
芝愛宕下四丁目二番地
編輯人 久保田彦作
米沢町一丁ノ七番地
出板人 堤吉兵衛

守川周重画

新編西國奇談 廿編 追々出版
薄緑娘恋女 八編 追々出版
娘庭訓黄金の鶏 追々出版

御届 明治十一年十二月十七日
神田區仲町一丁目六番地
編輯人 篠田久次郎
日本橋區米沢町一丁目七番地
出版人 堤吉兵衛

地本錦繪問屋

010190517883

賀
和
賀
和
賀
和